風の末裔シリーズ・３ｒｄシーズンの５

～燕の受難～

©西風そら
http://nisikaze.sakura.ne.jp

青空に点が見えたかと思うと、あっと言う間に馬のシルエットになった。
シルエットは風切り音を唸らせ、凄い勢いで降下…と言うより落っこちて来て、地上近くで掛けたブレーキの風圧が、すり鉢状に地面をえぐった。普通なら馬もヒトも気圧とGにヤラれてタダじゃ済まないが、このヒト達は平然としている。
「お久し振りです、大長！」

「ご苦労様、ツバクロ。来て貰って早々、文句言うのも何ですけれど、もうちょっと静かに降りて下さい。西風の里は年寄りと子供ばかりなんです」
蒼の長は、すり鉢状にえぐれた地面の周りで吹っ飛ばされて転がっている老人や子供達を助け起こしながら言った。
「これでも手加減して降りたんだけれどなあ…」
ツバクロは周囲を見回して、一人だけ転ばずに踏ん張っている娘を見止めた。
「ヤッホ！　君がモエギ?!」
西風の里に長らく滞在して世話を焼いていた大長だが、蒼の里にだって彼を必要とする用件が山ほどある。で、一時ツバクロに任せて、蒼の里に戻る事にしたのだ。
「大長の手紙を見て、早く会いたかった。ツバクロって呼んでくれていいよ。よろしく！」
「あ、ああ…よろしく…」
『あの』モエギが憎まれ口の一つもきかず、素直に挨拶して心なしかドギマギしている。恐るべし、流し目王子…!!

西風の里は戦の爪痕で若者が極端に少ないが、年頃な娘達は幾らか存在した。東の国から竜のように降りて来た妖精が、絵物語の騎士みたいな美男子だと聞いて、窓に鈴なりになって、かしましく見つめている。
「何処へ行ってもこの現象は変わらないんですねえ、ツバクロ」
「モテてもモテなくても、僕に愛を与えてくれる女性は、この世に一人いれば十分なんですが」
こんな気恥ずかしくなる一言も、ツバクロは照れの一つも見せずにさらりと言ってのっける。そういうのが余計乙女心をくすぐるのか?
側を歩いていたモエギが面白そうに聞いた。
「じゃあ『妻一筋の長』ってのは、あんたか」
「やだなあ、大長、僕らの事、このお嬢さんに何て説明しているんです?」
長が口を開く前にモエギが答えた。
「あと『怖い細君の尻に敷かれている長』と、『モエギに会っ

た瞬間バトルになる長』だ」
ツバクロは頓狂な顔をして、そして笑い出した。
「大長、…それ、的確だけれど、あんまりだ…！」

引き継ぎは明日ゆっくりする段取りで、その日はささやかな歓迎を受けて、ツバクロは用意された寝所へ下がった。
しかし夜中日付が替わる頃、長の部屋へ枕と毛布を引きずって入って来た。
「大長ぁ～～」
「どうしたんです？　南京虫でも出ましたか？」
「床でいいから、こっちで寝かして下さぁい…」
流し目王子は情けない顔で床にヘタリ込んだ。
「この里のヒト達は何考えてんだ？」
「一体どうしたっていうんです？」
長に背中を向けて、ツバクロは床を這って、そおっと入り口から外を覗いた。
「…また来た……」
「…？？」
「まるでワンコ蕎麦のように、次から次へと女の子が訪ねて来るんです。蒼の里の話をしてくれとか言って」
「……」

「最初はお茶入れてイチイチ話し相手をしていたんだけれど、一人帰るとすぐ別の娘が来る。いい加減眠たいのに」
「……」
「僕とお喋りしたいんなら、まとめて来てくれればいいのに。それか昼間に。第一、何だって夜更けにあんなに女の子がウロウロしているんです？　親御さんは心配しないんですか？」
「ツバクロ……あのね……」
長は溜め息を付いて、寝台の上にアグラをかいて座った。
「西風の里の老人達は、蒼の里の血統を入れたがっているんです。自分達の使えない術にちょっと憧れているんでしょうね。西風には西風独自の素晴らしさがあるんですが…」
「…へ…？…？」
ツバクロは目を点にして暫く考え込んだ。この男は一見女性慣れしていそうで、実は純情朴訥(ぼくとつ)だったりする。何せ足掛け四十年掛かりの恋を、執念で実らせたのだ。
「え？　何？　あの娘達、僕に、その……えええっっ?!」
「既成事実を作りたかったのでしょうね」
「僕は、タネウマかぁ～～っっ?!」
紺色の癖っ毛をクシャクシャにして、ツバクロは眠気も吹っ飛んだ情けない悲鳴をあげた。
「良く素直にそう言うのに応じるね、あの娘達！　結構可愛くて素直な娘達だなあって思っていたのに！」
長はちょっと真剣な顔をして、ツバクロに正面向いた。
「素直で真面目だからですよ。里の将来の為だと言われれば、我が身は二の次になるんです」
「……」
「その里にはその里の定石があるんです。娘達なりに一生懸命なんですよ」
「…僕、どうすりゃよかったんです…？」
ツバクロは仔犬のような困った顔になって長を見た。
「そのままでよかったんですよ。娘達は勇気を奮って行ったけれど、蒼の妖精殿はその気にならなかった…、それだけです。誰も叱られません」
「……大長…」
ツバクロはふと思い付いて、顔を上げた。
「大長もおんなじ目に遭いました？」
「…私は初日は厩へ避難しました……」
＊＊＊
遥か東方から遠路飛んで来て、堅い床で寝る羽目になった憐れな妖精に、翌日、更なる受難が待ち構えていた。
朝、寝惚け眼で池から引かれた水場へ行った時、周囲が何だかざめいたが、特に気にしなかった。顔を洗って振り向くと、

凍り付いたように突っ立ったモエギがいた。
「やあ、モエギ、おはよ…」
「…!! 私に、話し掛けるな!!」
オレンジの目をギラギラと怒りでたぎらせて、モエギは大股で去って行った。
「…?…?…?」
茫然と立ち尽くすツバクロの耳に、周囲の娘達のクスクスというさざめきが入った。
水場にカメを持って現れた老人の一人が、カメを横に置いて、ツバクロに仰々しくお辞儀をした。
「夕べはお疲れの処、多々のお情け、感謝致します」
ツバクロは首に掛けていた手拭いを落っことして、長の所へ駆け戻った。
「最初に一人が見栄を張っちゃったんでしょうねぇ」
長は苦笑しながら引き継ぐ仕事を書類にまとめていた。
「な、な、何とか、して、下さい!!」
ツバクロは癖っ毛を逆立てて長に詰め寄った。
夕べ、蒼の妖精殿の所を訪ねた娘達が、自分一人が相手して貰えなかったとは言えなくて、結局全員、目眩(めくるめ)くような夜を過ごした事になっていた。
今日の午後には長は帰ってしまう。ツバクロは『節操のない絶倫男』の烙印を額に押されたまま、一人この里に取り残されるのだ。
「だからって、娘達を嘘つきにしちゃ、可哀想じゃないですか」
「僕は可哀想じゃないんですかっ?!」
泣き出しそうなツバクロに、長が一つの提案をした。
「取り敢えず、モエギの誤解は解きましょう。彼女が何かよい知恵を出してくれるかもしれません」
「僕、外に出たくありません…」
ツバクロは情けない顔で膝を抱えた。こんなド純情男の何処がタネウマだって言うんだろう?
長は溜め息を付いて、モエギの事を引き受けて、外へ出て行った。
「あんまりだ…、僕が何をしたっていうんだ……」
頭を抱えて一人部屋に残る哀れな妖精に、受難は追い討ちを掛ける。
カツ、カツ……
窓のヘリを叩く者がいる。ツバクロはソロ〜ッと戸口の方から外を見た。
窓の所にいたのは、女の子じゃなくて、馬屋番の少年だった。

ややホッとして、窓に回って顔を出した。
「何か用事かい?」
「あの……」
少年は罰悪そうに、ツバクロを見上げた。
「貴方の馬…」
「あ、ああ、奴は気性が荒いから…、言う事を聞かないかい?」
「いえ、その…昨日の飛行を見て、カッコイイなって…」
「ああ、有難う…」
ツバクロはホッとした。
こんな子供には大人の卑猥な噂は届かないらしい。
「僕達もあんな風に、飛んでみたいなって言っていたんです」
「ああ、一朝一夕じゃ無理だ。でも、滞在している間に、少しづつ教えてあげるよ」
「それが、もう…」
「…??」
「僕の相方が、ちょっとだけって、乗って急上昇して、帰らないんです」
「――なんだってぇえ――?!」
ツバクロは弾かれたように外へ飛び出した。ふざけた視線など無視して、里を駆け抜ける。頬を染めた娘がきれいに洗った手拭いを差し出したが、それも無視した。
「何処で? どの位前?!」
「馬繋ぎ場で、ほんの一時(いっとき)前」
ツバクロの馬は、飛び抜けて気難しくヤンチャだ。里でもツバクロ以外にはちょっと扱えない。蒼の一族でもない子供にいきなり跨がられたんじゃ、気分を害して何をやらかすか分かったモンじゃない。
「闘牙の馬は?!」
「蒼の長様が乗って行かれました」
「…じゃあ、君達の馬を貸して。なるべくバネのある奴」
少年は、見事な飛節の粕鹿毛の馬を引っ張り出した。
「一番ジャンプ力があります」
「よし、じゃあ、君は、大長を捜して知らせてくれ」
ツバクロはヒラリと馬に跨がった。
「行け!!」
西風の里の馬は人間の馬に近い能力しかないが、ツバクロは風を起こして馬を包んだ。彼の飛行能力は里一番だ。馬は強力な風に包まれ、本人もびっくりする程のジャンプをした。
少年は唖然と見送ったが、気を取り直して自分の馬を引いた。長様の行き先は見当付いている。モエギ様の所へ行くと言って

いたから、砂の民の村外れだ。

＊＊＊

西風の里を出て、ツバクロは一度も地面に着かずに馬を飛ばし続けた。当の馬は初めての体験にすっかり怯えている。

「大丈夫だ、僕に任せておけば」

ツバクロは馬に優しく声を掛けて、自分の草の馬の気配を探した。

アイツが無茶に飛んだのなら、風の乱れた方向がある筈だ。目を細めると、風が千切れて一直線に切り開かれた道が出来ている。

「あっちだ…行くよ!!」

乗り手が更に風を呼んで、馬は心の準備も出来ないまま高空へすっ飛ばされた。ピィ〜〜と鼻から悲鳴を上げるが、この乗り手は脚を緩めてくれない。

「いた!!」

前方に黒い点を見付けた時は、この並みの馬はヨダレと鼻水でぐちゃぐちゃになっていた。

「おーい!!」

ツバクロが声を掛けると、馬上の少年は振り向いた。てっきり馬の背中に張り付いて半泣きになっていると思いきや、意外と涼しい顔をしていて、ツバクロを見て罰悪そうに首を竦めた。

夏草色の馬は主に気付いて、早駆けしていた歩を緩めた。こちらも予想と違って、そんなに興奮した様子もない。ツバクロは馬を急がせ、少年に並んだ。

「ごめんなさい、ツバクロ様…」

少年は上目でツバクロを見た。

しかしその顔は頬を紅潮させ、直前まで時間も忘れて楽しんでいた風に見受けられる。

夏草色の馬は主が別の馬に跨がっているのを見咎め、機嫌を害して、哀れな鼻水だらけの馬に噛みつきに来た。

「こら、ダメだよ、苛めないでおくれ」

ツバクロが叱る前に、少年が手綱で制して馬の首に手を当てた。気難しい草の馬は、以外にも素直に首を下げた。

「へえ……」

ツバクロはかなり驚いた。だって草の馬が主の許可無しに蒼の妖精以外を乗せるなんて、まず有り得ない。ましてや夏草色の馬は、里でもツバクロ以外には馬銜(はみ)すら受け付けない。

「お前、どうしちゃったの?」

再度並びかけながら、ツバクロは相棒に聞いた。馬はクルル、と喉を鳴らした。いやあ、ボクとした事が…って感じの声だ。

「よく乗りこなしたな」

ツバクロはようやく少年に声を掛けた。
「すみません…、ちょっとだけ、のつもりだったんです」
「ふうん…」
ツバクロは複雑だったが、ここは大人として懐深く対処せねばなるまい。
「叱るのは省略だ。反省は自主的にしておけ。空を飛ぶのは初めてか？」
「蒼の長様に一度、前に乗せて貰いました。その時、大体の感覚を掴んだんです」
「ほお…」
確かにバランスも重心の取り方も危なげない。
「じゃあ、里までそのまま一緒に降りよう。着地が一番難しい。基本を教えてやる」
「は、はい…!!」

二頭はゆっくり里へ向かった。
「あれ？」
里の近くの洗濯板みたいな岩の上に、長とモエギ、それにハトゥンが手を振っていた。
二頭はそちらへ降下した。ツバクロの馬は安堵一杯の顔をして、やっと恋しい地上に降りた。少年もツバクロに導かれ、なかなか上手く馬を降ろした。
「えーと…」
地上に降りたツバクロが何か言う前に、モエギがこめかみをポリポリ掻きながらポソッと言った。
「悪かったな、誤解して…」
ハトゥンがニヤニヤしながら片手を上げた。
「よ！　精殖一代男!!」
「…勘弁してくれ…」
「悪りぃ、悪りぃ。とんだ災難だったな。女って、束になると凶悪だぜ。特に西風の娘はな。気を付けなっ」
ギロリと睨むモエギの視線をスルーして、ハトゥンは右手を差し出した。
「砂の民のハトゥンだ。西風の里の男は老人とガキばっかだからな。俺でよかったら今後とも萬(よろず)相談に乗るぜ」
「あ、ああ…、ありがとう。ツバクロだ、よろしく」
ツバクロはやっとマトモな言葉の通じる相手に出逢えた気分になって、ホッとした。
「それで、里の方の対策ですが…」
蒼の長が二人をにこやかに眺めながら切り出した。
「モエギがよい案を出してくれました」
「ホントっ?!」

「ああ、女の子達が自ら嘘を告白すればいいんだろ」
「出来るの?! そんな事!」
「あんたの協力も要る」
「勿論!!」
「よし!!」
蒼の長は二人の会話を聞きながら、ハトゥンの方を見た。
「いいんですか?」
「ああ、俺は全然構わないぜ」
モエギはツバクロを真正面から見据えて言い切った。
「今から、あんたは、私の、ハズだ!!」
「えええええっ!!」

＊＊＊

西風の里の上空に、死にそうな悲鳴が響き渡った。ドップラー効果と共に、ツバクロが自分の馬と一緒に落っこちて来た。
里の中央広場に、クレーターを描いて、大の字で伸びる蒼の妖精。馬は難なく着地して、主をキョトンと見る。
老人達も、娘達も、何事かと集まって来た。
一拍置いて、上空から闘牙の馬に跨がったモエギが降りて来る。
「申し開き出来るってんなら、やってみろ! この飄録玉(ひょーろくだま)!!」
馬から飛び降りて、長鞭を二重にしてビシビシしごきながら、倒れているツバクロに迫る。
「こ、これ、モエギ…、ツバクロ殿に何て事を…!」
老人がおろおろと口を挟むが、口だけで身は挟まない。
「ま、待て、モエギ、ゴカイだ……」
ツバクロは起き上がって後退りする。
「うわ…大根…!」
物陰の長とハトゥンは首を竦めた。
…この作戦、僕の威厳はどーなるんですか? そう心配するツバクロに、『精殖一代男』とどっちがマシだ? と半笑いで面白そうに迫ったのはハトゥンだった。
「モエギよ、どういう事じゃ?」
老人の一人が杖の陰に隠れながら、そおっと聞いた。
「みんなに内緒にしていたけれど、私、このヒトと付き合っていたんだ。蒼の長の仲介で。第二夫人でいいからと譲歩してやったのに、里の中に第三第四第五云々夫人まで作るとはぁあ!!」
モエギはオレンジの瞳をメラメラと燃え立たせ、鞭をヒュッと飛ばした。ツバクロの耳の横を鞭の先がかすめ、癖っ毛の先がハラリと落ちた。演技とは思えないんですケド……。

「だから…ゴカイだ。ボク、何もシテナイ…」
「まだ言うかぁあ――――!!」
ツバクロの大根はモエギの迫力でカバーした。再び鞭を振り上げた所で、娘の一人がヨロヨロと進み出た。
「ま、待って下さい…。ご免なさい、私、嘘付きました…」
それを皮切りに、娘達は次々に嘘を告白した。
結局、蒼の妖精殿は娘の誰とも関らなかった事が明白になった。やれやれだ。
ツバクロは肩を降ろしたが、モエギはまだ止まらなかった。
「誰がこんな酷い事を企んだ?!」
メラメラ燃える眼は老人達に向けられた。
「ひ、酷いとは…? 里の将来の為、蒼の妖精の優れた血統を入れる事は大事で…」
「西風の娘達は、血を受ける器ではない!!」
モエギは落雷の如く一喝した。既に演技は終了していた。
娘達は顔を上げた。誰に言われるでもなく、自分達の意思でモエギを見つめた。
「我が里の誇るべき娘達は、西風の誇るべき血を伝える、一人一人、大切な娘達だ!!」
「立派です…。浅葱殿も喜ばれる……」
物陰の長はポツリと呟いた。
横のハトゥンは珍しい真顔で、碧碧の髪が波打つ西風の娘を黙って見つめていた。
蒼の長は出発の前に、馬屋番の二人の少年を草の馬に乗せて、里の老人達に見せた。
「私も最近まで気付かなかったんですが…」
少年達は危なげなく馬を駆り、難しい着地もきちんとこなした。特に夏草色の馬に乗った先の少年は、ツバクロかと見まごうばかりの急降下もやってのけた。
「蒼の妖精だって、草の馬に乗るには長い訓練が要るのです。西風の妖精は素晴らしい能力を秘めているんです。どんな馬でも心通わせ、手の内に入れてしまう能力。もしかしたら馬だけじゃないかもしれません。その可能性はこれから貴方がた皆で模索し、育てるのです」
上空高く舞い上がり飛び去る長を、ツバクロも少年達もモエギも、見えなくなるまで見送った。
長が見えなくなり、西の雲が桃色にうっすら染まって、老人達はニコニコとツバクロに切り出した。
「で、祝言は如何致しましょう?」

「は……？」
「貴方様とモエギの。第二夫人とはいえ、我が里の大切な長娘。ないがしろには出来ますまい」
「え？　えーと……」
しどもどのツバクロの肘を引っ張って、モエギがきっぱり言った。
「急がなくていい。私達はじっくり愛を育む時間が欲しい。な、ハズ」
あのモエギがなあ…という雰囲気で、皆にこやかにその場を去って、モエギはツバクロを突き飛ばした。
「ホンット、あんた、優柔不断な！　そんなだから、あんな事になったんだぞ」
「ごめん…」
「滞在している間は、ハズって事にしておいてやる。そうしておけば、老人達も安心しているし、娘達は二度と寄って来ないだろう」
「え…それは……」
モエギにギロリと睨まれてツバクロは黙った。

何だか大変な里だが、良い所には違いない。明日から引き継いだ仕事をこなして、子供達の飛行指導、…女の子と関わって

いる暇なんて、確かにないだろう。
襟元正して心新たにするツバクロだったが、蒼の長が帰りがけに、風出流山の神殿に寄り道して、この話をバラして蒼の狼の大爆笑を取った事は、知る由もない。

～おしまい～

二〇〇九・一一・二九